シー・ラボレーション C-LLABORATION 瓦版 kawaraban Vol.10

HCV抗体陽性者早期発見院内連携プロジェクト

医療法人ロコメディカル江口病院の取り組み

副理事長が導入した“ロコメディカルフィロソフィ”が短期間で院内に浸透。スタッフ全員が“目くばり 気くばり 心くばり”の肝炎対策を実践する。

「ロコ」とは、“土着”を意味するハワイの言葉である。佐賀の地に開院してから約100年という長きにわたり、江口病院は地域密着型の病院として歩んできた。理事長の江口尚久氏は肝臓内科医、元佐賀大学教授で副理事長の江口ゆういちろう氏は日本の肝炎対策をリードする第一人者である。そうした背景もあり、江口病院スタッフの肝炎対策に対する意識は高く、約100名のスタッフが肝炎医療コーディネーター（肝Co）の認定を受け、さまざまな取り組みを行っている。どのような思いで、どのような肝炎対策を行っているのか。江口ゆういちろう氏をはじめとする病院の方々にお話をうかがった。（2021年9月21日取材）

副理事長、ロコメディカル総合研究所所長	江口 ゆういちろう 氏	栄養管理科 主任 管理栄養士	田中 薫 氏
理事長	江口 尚久 氏	リハビリテーション科 科長 理学療法士	佐藤 圭 氏
看護部長	森木 由美子 氏	リハビリテーション科 主任 理学療法士	柿塚 奈津美 氏
外来師長 看護師	松岡 直子 氏	診療部ドクターズアシスタント 主任	小山 茜 氏
一般病棟 看護師	本告 佳織 氏	診療部ドクターズアシスタント 副主任	福田 裕子 氏
薬剤科 科長 薬剤師	大島 瑛子 氏	医事課 まごころ室 室長	常陸 真理子 氏
栄養管理科 科長 管理栄養士	平川 美智子 氏		

未治療のHCV抗体陽性患者を1人でも多く受療につなげる。

江口（尚）　かつて佐賀県は、肝癌粗死亡率（人口10万人当たりの死亡者数）が19年連続（1999～2017年）で全国ワースト1という不名誉な記録を持っていました[1]。しかし2018年、ようやくその汚名を返上することができました。当院の副理事長が佐賀大学時代に行ったさまざまな肝炎対策が実を結んだものだと考えてよいでしょう。しかし、ワースト1位から脱却できたからそれでよい、ということにはなりません。まだC型肝炎ウイルス（HCV）抗体陽性であることを知らずに生活している方がいますし、陽性とわかっていても受療に至っていない方もいます。そうした未治療の陽性者を1人でも多く減らしていくことが重要です。

江口 尚久 氏

私たち医師の力だけでは進められないのが肝炎対策です。肝炎医療コーディネーターの力によって支えられています。

森木　C型肝炎は飲み薬で治療ができる時代になりましたから、積極的に治療を促す環境はできていると思います。当院ではほぼすべての部署に肝Coの認定を受けたスタッフがおり、自分たちの部署でできる肝炎対策は何かを考える体制ができています。

森木 由美子 氏

江口（ゆ）　患者さんごとに置かれた状況は異なるので、受検、受診、受療、フォローアップの各ステップにおいて、さまざまな職種の関わりが求められます。医師のみならず、看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師、理学療法士、医療事務といった職種のほか、ソーシャルワーカー、介護福祉士、ケアマネージャーなども肝Coとして関わることで、肝炎患者さんの治療意欲向上や生活の質の向上が期待できます。医師よりも、むしろそうした職種の方々のほうが、より患者さんの治療継続の後押しになっていると思います。

江口病院の肝Coは約100名。肝Coの認定を受けたことで知識が増えた、自信がついた、責任感が芽生えた。

松岡　肝Coになったことで、肝炎に対する意識は高まりました。自分でも勉強しましたし、患者さんと接するなかでも知識が増えました。経験を重ねるにつれて、頼ってくださる患者さんの数も増えたように思います。

本告　私も、患者さんに育てていただいているのかなと思います。当院では、当院オリジナルの肝Coバッジや佐賀県肝Coバッジ（写真1）をつけて業務しているのですが、これをつけているのだからしっかりしなければという気持ちにもなります。

平川　肝Coとしては、常に新しい情報にアップデートすることで、肝炎患者さんの力になりたいと考えています。特に、肝炎は肝癌にも進行する可能性がある病態なので、早期介入の必要性を痛感します。私たち管理栄養士の役割は大きく、栄養療法がいかに重要かをお伝えし、行動変容に結びつけたいと思います。

平川 美智子 氏

写真1　左：ロコメディカルオリジナルの肝炎医療コーディネーターバッジ
右：佐賀県肝炎医療コーディネーターバッジ

田中　私はまだ職歴が浅いのですが、正しい知識を持って患者さんと接することができるようになったと感じています。また、当院の肝Coは皆、同じベクトルでものを考え、行動していることに気づきました。まずは自分ができることから始め、多職種との連携が必要な場面ではしっかりとつなぐことを意識しています。

田中 薫 氏

佐藤　肝Coになる前は、理学療法士としての関与は少ないのかなと考えていましたが、そんなことはありませんでした。肝炎の患者さんは高齢の方が多いので、フレイルやサルコペニアにならないように注意する必要があります。将来に起こりうる運動機能の障害を予測したうえでのリハビリ指導は、肝炎患者さんにとって不可欠です。また、最近は管理栄養士との連携も強化しており、リハビリの質も向上していると感じています。

佐藤 圭 氏

柿塚　「できない動作をできるようにする」のがリハビリの基本ですが、肝Coになってからは、問題のない筋力を長期にわたって維持することも大切だとあらためて認識するようになりました。また、肝炎の患者さんでは倦怠感が問題となるので、リハビリでの負荷の量は注意深く設定するようにしています。

小山　糖尿病、高血圧、脂質異常症などの生活習慣病の患者さんのなかには肝臓病のリスクが高い方もいらっしゃいます。そうした方に対して、脂肪性肝疾患の抽出のために医師に声掛けし、腹部エコー検査の重要性を医師から説明していただいたり、ウイルス性肝炎検査が未受検の方へは受検を促したり、診療のサポートになるような業務を心がけています。

小山 茜 氏

福田　受診される患者さんのカルテを事前に確認し、いつどのような検査をしたか、今回の受診でどのような検査が必要か、などを診察前に先生に伝えるようにしています。肝Coとしての知識がその業務に役立っています。

常陸　医事課では、主にさまざまな医療費助成制度のことを患者さんにお伝えすることが多いのですが、肝Coになったことによって肝炎についての知識が身につき、自信を持って患者さんに説明できるようになりました。

大島　薬剤師としては、治療を開始した患者さんに対する薬の説明や、正しく服用しているかのチェックなどが主な業務です。肝Coがどの職種に

常陸 真理子 氏

1）厚生労働省ホームページ. 人口動態調査. 人口動態統計（確定数）の概況（平成10年～平成30年）
https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html（2021年11月閲覧）

もいるという点は当院の大きな強みで、日々、横のつながりを意識して業務を行っています。

江口（尚）　患者さんは、医師に対して「わからなかったのでもう一度説明してください」とはなかなか言えません。肝Coの皆さんはそうした状況を察知して、丁寧に患者さんに説明してくださるのでとても助かっています。肝Coの働きなくして、肝疾患診療は成立しません。

江口（ゆ）　完璧な肝Coになることを目指す必要はないと思います。背伸びをせず、できることから行っていこうという精神が大切です。地味な努力を積み重ねることが経験となり、自信となり、やがてはチーム全体の成長につながります。

常 に明るく前向きに。できることからちょっとずつ。

本告　患者さんとのコミュニケーションはとても大切です。言葉で伝えるだけでなく、メモ代わりのメッセージカードを渡すのが私たちの習慣です（写真2）。入院患者さんの場合は、手書きのお誕生日レターや退院おめでとうレターを渡すようにしています（写真3）。

本告 佳織 氏

松岡　新型コロナウイルス感染症の影響で、院内外でのイベントがなかなかできない状況なのが残念です。流行が収まったら、勉強会や肝臓病教室などの企画を進めて盛り上げていきたいと考えています。

松岡 直子 氏

大島　肝Coの認定は調剤薬局の薬剤師にこそ必要ではないかと思います。外来患者さんの多くは処方箋を持って調剤薬局に行くので、そこで肝臓の知識を持った薬剤師が対応すれば、患者さんにとって大きなメリットになるはずです。今後は、地域の薬剤師に向けた肝Co啓発も行っていければと考えています。

大島 瑛子 氏

平川　これをしてください、あれをしてください、だけでは患者さんは心を開いてくださいません。傾聴し、共感することが大切で、それぞれの考えや生活背景を理解したうえで対応することを心がけています。また、「この患者さんに一番響く言葉はなんだろう」と常に考えるようにしています。

田中　少しでも楽しく過ごしていただきたいという思いから、入院患者さんのために管理栄養士、調理師、調理員のみんなで手作りの箸置きを作っています（写真4）。また、かわいいオリジナルケーキを作ったり、2021年の肝炎デーは丑の日だったので、うなぎをメニューに加えたりしました（写真5）。常に工夫することを考える毎日です。

佐藤　まだ構想段階ですが、新型コロナウイルスの蔓延が終息したら、集団体操のような、患者さんが楽しくリハビリを継続できるようなイベントも企画していきたいと考えています。体を動かすきっかけにしてもらえれば嬉しいですね。

柿塚　理学療法士は、リハビリを通じて患者さんと接している時間が長いので、患者さんの変化に気づきやすいというメリットがあります。その変化を院内の肝Coと共有することで、よりよい治療に結びつけられればと考えています。

柿塚 奈津美 氏

福田　私は通院が必要なのに受診が遠のいている患者さんに対して電話することが多いのですが、「行きづらくなっていた。電話をもらってよかった」と言ってくださったときには、この仕事をしていてよかったなと思います。患者さんへの声掛けは、これからも積極的に行っていきたいと考えています。

福田 裕子 氏

小山　医師も看護師さんもとても忙しいので、私たちドクターズアシスタント（医師事務作業補助者）が細かな業務をサポートすることで診療に専念していただきたいと思います。だから私たちも、もっと努力して、肝Coとして必要な知識を習得していきたいと考えています。

常陸　「江口病院に行ってよかった」という評判が、地域のなかでさらに広がっていけばよいなと思います。そして、地域の皆さんの日常会話のなかでも「一度相談してみたら?」「気軽に受診してみたら?」みたいな肝疾患に関する話題が出ることを願っています。

森木　「目くばり 気くばり 心くばり」は私たちスタッフすべてが意識している言葉です。患者さんがどのような生活をしていて、どのような考えを持っているのか、不安はあるのか、あるとしたらどのような不安か。そうした患者さんの背景にも考えを巡らせながら、最適な医療を提供していきたいと考えています。

ロ コメディカルフィロソフィを共有し、院内、そして地域において目標高く果敢に挑戦する医療を展開したい。

江口（尚）　病院のスタッフが肝疾患に対する意識を高め、患者さんに向き合っていることを本当にうれしく思います。全従業員が物心両面の幸福（しあわせ）を追求すると同時に、質の高い医療が提供できる環境を整えていくことが私の務めと考えています。また、私はこの地で長く診療していますから、地域との関りは非常に深く、肝炎や肝癌について講演する機会も多いのですが、そうした活動はこれからも継続していきたいと考えています。

江口（ゆ）　私が2020年3月に佐賀大学を辞し、この病院に勤務することになってから導入したのが“ロコメディカルフィロソフィ”という仕事や人生の指針で、全職員が手帳として常に携帯しています（写真6）。これは全職員が同じ価値観を持ち、一体感を持って医療や介護に取り組むための羅針盤です。そのフィロソフィが全職員に浸透したことで、院内の意識は大きく変わりました。その結果、カスタマーエクスペリエンス（医療介護のプロセスを取り巻く患者さんや利用者さん視点からの体験）の向上につながっていると思います。これからも、ロコメディカルフィロソフィの実践を、病院の全職員と継続していきたいと考えています。

江口 ゆういちろう 氏
ロコメディカルフィロソフィ導入後、病院スタッフの意識と行動は大きく変わりました。今後も、カスタマーエクスペリエンスの向上を目指した肝炎対策を継続します。

現在、厚生労働省の研究班でも「肝炎医療コーディネーターフィロソフィ」の作成を行っています。それが完成すれば、全国の肝Co活動の大きな羅針盤になると期待しています。

スタッフのみなさま

写真2　患者さんに手渡すメッセージカード

写真4　患者さんのために定期的に作成している箸置きとメッセージカード

写真5　季節やイベントに応じてメニューにも工夫を凝らす

写真3　入院患者さんへのお誕生日レター

写真6　全職員が携帯するロコメディカルフィロソフィ手帳

アッヴィ合同会社
2023年5月作成
JP-MAVI-210405-2.0

abbvie